

## ヨーロッパでは「赤ちゃんを運んでくる鳥」、 日本では「めでたい鳥」

コウノトリと言え「赤ちゃんを運んでくる鳥」とイメージされる方も多いかもしれない。でもコウノトリには2種類いて、これはヨーロッパコウノトリのこと。「シユバシコウ（朱嘴鴻、シユバシコウ）」とも呼ばれる。名前の由来をめぐって説はいろいろあるようだが、どこで読んだか忘れてしまったが、私は次の伝説が好きだ。

古代のゲルマン民族では、人間は死ぬと霊は肉体から分離し、天上に昇るのだという。そして昇った霊は雲の中にしばし居たのち、雨と共に再び地上に降りて沼の底にひっそりとどまる。やがて女神ホレ（Frigg、Frigg）、ゲルマン神話の女神が、どこかで赤ちゃんを欲しがっている夫婦がいるとわかると、コウノトリに命じ、女神の使いとして沼から生命の精を拾い上げ、その夫婦に届けさせる、というもの。

この伝説は、案外理にかなっているように思う。沼＝水辺は、様々な生物の命の源だ。コウノトリが女神の使いとされたのは、水辺を主な活動の場としているからだろう。歩きながら餌となる生物を捕食する姿は、まさに精を拾い上げるイメージだ。巣づくりのために巣材を口にくわえて運ぶ様子は、あたかも風呂敷に包んだ赤ちゃんを大事に運ぶさまにそっくりである。



※本文に登場する方々の所属・肩書きはすべて当時のものとなります。

おまけに、コウノトリ夫婦の子育ては、愛情たっぷりで甲斐甲斐しい。見ている人間をして、微笑まずにはいられないだろう。やはり、ヨーロッパのコウノトリは「赤ちゃんを運んでくる鳥」なのだ。

では日本、そして東アジアのコウノトリも赤ちゃんを運んでくる鳥なのだろうか。否。その代わり、古来から「めでたい鳥」と言われてきた。正確に言えば「白い大きな鳥」がめでたい鳥の象徴で、ツル、ハクチョウ、そしてコウノトリのことを指し、高貴さや不老長寿などがイメージされる縁起物の鳥である。

## 「言っ出してっぺ」としてコウノトリ保護活動にかかわる

興味深いのは、特徴ある時代ごとにコウノトリの運命が変わっていつていることだ。詳しくは本文に譲るが、常に「人間に翻弄されてきた歴史をもつ鳥」と言ってもいい。

第二次世界大戦後、兵庫県豊岡市でわずかに残ったコウノトリの保護運動が始まるが、経済優先の社会の中では悲壮な取り組みだった。そして1971（昭和46）年、ついに日本に定着する野生のコウノトリは絶滅してしまう。普通なら、日本におけるコウノトリの歴史はこれでジ・エンド。あとはたまに越冬に来るコウノトリを見るだけ、となるとところだが、とっつい今、コウノトリは

不死鳥のようによみがえりつつある。

2022（令和4）年現在、約380羽のコウノトリたちが全国を飛び回り、46カ所で営巣するまでになっている。野生復帰の初期段階としては成功と言っていだろう。しかし、まだ社会や自然環境次第であつという間に滅びかねない数、これからが本番だ。

私は豊岡市役所にあつて、1990（平成2）年からコウノトリ保護を仕事として行ってきた。飼育下での保護増殖事業から始まり、「コウノトリの郷公園構想」「野生復帰計画」「コウノトリと共に暮らすまちづくり」に一貫して携わってきた。退職後は市民運動としての「コウノトリ野生復帰」に取り組んでいる。

本書では、行政の当事者（言っ出してっぺ）として、悩み考え、紆余曲折しながら取り組んできた内実を、精一杯ありのままに書いてみたい。個人の主観がたくさん入るので、客観性に疑問符が付く箇所も出てくると思うが、できるだけ行政記録にもなるよう心がけたつもりだ。また市民運動をするにあたっては、行政のような権限はもたないものの、自由な発想、行動が可能なので、小さな先事例をつくることを心がけている。

近年はコウノトリをめぐる社会の動きがすさまじく、私自身、わかったと思つたことが次の日には覆されることもある。いまだに明確なポリシーをもち得ず、自問自答の毎日で頼りないが、読者のみなさんと一緒に考えていきたいと思つ。よろしくお付き合いください。



# コウノトリに魅せられて

—「特別な鳥」か「田んぼの邪魔者」か？

コウノトリについて考えるときに、決して無視できないのが、その飛来地に住む住民たちのコウノトリへの感情だ。「瑞鳥、特別な鳥」と感じる人もいれば、田んぼに無遠慮に立ち入って苗を踏みつけ、餌をさがす「田んぼの邪魔者」として忌み嫌われることもある。ここで私が実際に見聞した3つのエピソードから、コウノトリをめぐる「人間の気持ち」を考えてみたい。

## エピソード1 1960年、コウノトリとの出会いは突然に

私が生まれ育った村、兵庫県豊岡市下宮は南北両側の山に挟まれた谷あいであって、集落や田ん

ぼは細長く東西に延び、南側の山の斜面には1929（昭和4）年から宮津線（現京都丹後鉄道）が走っている。1949（昭和24）年生まれの私が小学生だった当時、子どもの遊びというと、川や田んぼ、山を駆けまわることだった。この宮津線の線路も大事な遊び場だった。なにせ汽車は1日に数本しか通らないし、通過時に遭遇しても、煙を吐きながら登り坂を苦しそうにゆっくり走るので、山裾に避ければドキドキはするけど平気だった。もちろん、線路を歩いても学校に告げ口する大人なんていない。キャピキャピ言いながら線路を歩き、横の山に登ってわくわく探検して歩き回っていた。

そんな私が小学校5年生のとき。いつものように数人でにぎやかに山の中を歩いていると、目の前でお兄さんが望遠鏡で何かを覗いている。尾根から山の中腹を見下ろす方向に望遠鏡が設置されていて、後ろを振り向き我々に向かって「うるさいから静かにしろ」と言う。

そして悪ガキどもが早く立ち去るようと思ったのか、一人ずつ望遠鏡を覗かせてくれた。見えたのは、真っ白なコウノトリだった。巢の上にいたのが1羽だったか複数羽だったか、卵があったのかなかったのか、何も記憶には残っていない。でも、羽根を広げると2メートルにもなる大きな体が、まるで目の前にいるように迫ってきた。レンズの中にいた眩しいくらいのコウノトリの白さは、60年以上経った今でも鮮明に残っている。

後年、豊岡市役所でコウノトリ保護増殖事業を担当するようになり、あとき見た巢は、当時注目されていた鎌田・文常寺の営巣地だったことがわかった。望遠鏡を覗いていたお兄さんは、兵庫県立豊岡高校の生物部員だったのだろう。その頃、豊岡高校の生物部は熱心にコウノトリの生息を観察しており、その様子は機関誌『但馬の生物』第8号（1956年）〜第15号（1963年）に掲載されている。

それによるとコウノトリが営巣していたのは1957（昭和32）〜1960（昭和35）年の4年間となっている。私が見たのは1960（昭和35）年なので、ここでの営巣最後の年だった。ちなみに、この年の豊岡市と養父市での営巣は8カ所あったが、翌1961（昭和36）年には5カ所にまで減っている。

ここで「営巣」と書いたが、実は豊岡周辺での繁殖は1959（昭和34）年の福田地区の巣が最後。つまり私の見た文常寺の巣も、たとえ産卵していてもヒナは生まれていなかったのだ。神々しいまでに輝いていた親鳥の白さは、絶滅していく一族の悲哀の色だったのかもしれない。

『但馬の生物』第12号に1960（昭和35）年の福田地区での観察についての文章がある。最後の孵化が記録された翌年だ。一部を要約して紹介しよう。

毎年コウノトリは減ってゆく傾向にある。本年は、昨年より多く育てほしいと願っていたけれども、昨年より増えるどころか、1羽もフ化しなかった。これは、コウノトリを毎日観察してきた我々生物部員にとって、非常に痛い打撃であった。（中略）幾日たってもフ化しないばかりか卵が1個又1個と巣の中から見えなくなってゆき、ついに1個もなくなってしまった時から、観察の目標が事実上なくなってしまったことになり、観察に身が入らずついに（昭和）35年度のコウノトリ観察を中断するに至った。残念ではあったがいたし方なかった。

その後、コウノトリが孵化することはなかった。ヒナの姿が見られなくなっただけでなく、やがて成鳥も1羽、また1羽と減り続け、1971（昭和46）年にはついに、日本での個体群は野外からひっそりと姿を消してしまう。

コウノトリがそんな危うい状況になっているなど、そのときの私たちはわかるはずもなく、真っ白に輝く大きな鳥にただただ、圧倒的な存在感を感じていたのだった。

## エピソード2 2001年夏、隠岐の島で野生コウノトリの力に感じ入る

私がコウノトリ文化館の館長（第6章参照）になって2年目の2001（平成13）年夏、「島根県隠



「田の草刈り（除草作業）」で夢中になり、顔を上げるとそこにはコウノトリがいる  
(豊岡市内、撮影：西村英子)

岐の島にコウノトリが飛来している」との情報が入った。8月初旬に休暇を取り、妻と見に行くことにした。この年、兵庫県が「飼育しているコウノトリが増えて100羽になれば、放鳥（野生に放すことに）したい」と発言していたので、ぜひ野生コウノトリの姿を見ておきたかった。何せ中学生からずっと野生コウノトリにはお目にかかっていない。現場で見ると、その感触を身に付けておきたかったのだ。

飛来したコウノトリは、前年の12月に大陸から宮崎県に1羽で渡り、越冬していた個体だという。翌春に生息地に帰るために北上した方がいいが、何を思ったか東に舵を切り、隠岐の島に着地してしまった。5月中旬以降、この地に住み着いているらしい。場所は島後の五箇村（現隠岐の島町）である。レンタカーを借り、村の中心部から山の谷あいを通り過ぎると、そこは一挙に開けた田園地帯となっていて、まさに飛来地にぴったりの「それらしき」雰囲気を漂わせている。五箇村の水田の広さは約1.5キロメートル×1.0キロメートル。海に面し三方を山が囲む盆地で、山裾に人家が配置されている。河口は小さな漁港になっており、まるで私が住む豊岡盆地のミニ版のような地形だ。まずコウノトリの姿を確認しておこうと、到着する2日前に目撃情報のあった牧草地（牧場）に直行した。しかし姿は見当たらない。仕方なく来た道を引き返し、田んぼや水路を懸命に探す、目に入るのはアオサギだけ。

「やはりだめか…」「ん?」。遠すぎてはつきりとはわからないが、500メートルも先、夏の日差しに映えるその真っ白で丸い姿が強烈な異彩を放っている。日頃、私が勤務するコウノトリの郷公園（第6章参照）の施設で見慣れているので、コウノトリであることは反射的にわかった。双眼鏡を覗くと、まぎれもなくコウノトリの頭部だ。稲の上からヒョッコリ顔を出している。「やれやれ」。慎重に近づき、ゆっくり観察する。やはりいい。周辺にいるアオサギとは桁違いの存在感だ。

私の祖母が言っていた「田んぼの除草中に気配を感じ、誰がいるのかと思うとコウノトリだった」との話の思い出。祖母はコウノトリに向かって『あっちに行ってくれ』と手で追い払っても、また次の田んぼにいる」とばやっていた。

私の村では除草作業を「田の草這い」と言い、腰を深く曲げて這うようにして、水田雑草をむしり取る。除草で目の前数十センチメートルの稲の根元しか見ていないとき、顔を上げると餌をとるコウノトリがいる、というのだ。

明治生まれの祖母の話をもっとたくさん聞いておけばよかったなあ、などと思いつつ、コウノトリは畔から飛び立ち、我々の頭上を旋廻し出した。盆地内をグライダーのように悠然と舞う姿は、これも感動ものだった。

五箇村は漁業と農業を生業とする静かな里で、人々は生活のリズムを崩さず、コウノトリと一定の距離を保ちながら生活されていた。コウノトリの方も順応し、当初は100メートル以内近づきだけで飛び立ったが、しばらくすると10メートルの距離でも逃げなくなったようだ。「ちょっとの関心」が、コウノトリにはとてもいい具合のように感じた。

この地の農家、高井章さんに尋ねてみた。初老の高井さんは役場が開拓したこの土地を牧場として買い、1人で12〜13頭の牛を世話されている。

「コウノトリが毎日近くにいるってどんな感じですか」

「うーん、心が落ち着くっていいのか、とても気持ちがいいね。1羽だけでなく、2羽いたらいいのに。このまま居付いてほしいからね」

ほかにも住民の何人かに同様の質問をしたが、大体同じような答えだった。たった1羽がただそこに居るだけなのに、コウノトリは人々の心の中に染み入り、みんなに安らぎを与えているようだった。

翻って豊岡では、コウノトリが里から消えて30年も経っていた。「豊岡に舞い降りてくれないかなあ」。漠然と、そんな風に思った。